

十種の益

(讚題) 「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八の道を超え、必ず現生に十種の益を獲。なにものか十とする、一つには冥衆護持の益。二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讚の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定衆に入る益なり」

浄土真宗は 平生業成、報土往生、弥陀同体と、現当二世の幸福を得る超異の宗教であり、超世不共、別意弘願、修身齊家、滅私博愛の真俗二諦の世界に冠たる妙法であると看板を掲げながら、真諦門が徹底していない為に、俗諦門が曖昧になり、現在を無視して未来の往生を夢みている為に、日頃の生活が浄化されていないのではあるまいか。

祖師聖人の宗教の特長は、単に肉食妻帯や、山上の宗教を山下に、祈祷の宗教を無祈祷に、僧侶の宗教を俗人に、行の宗教を信に転換されたのみではあるまい。外に向つては「然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す」と打ち、内に向つては「定散の自心に迷うての真信にし」と誠め、真、偽の分際を明瞭にすることが 聖人の宗教の特長の中の特長ではなかったか。

「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲る」のであるけれども、法を見れば往生は一定、に向けば往生は不定の、若存若亡の曖昧な信であり、有難涙の催す時は「これこれ」と腰を掛け、三毒五欲の煩惱の燃えたつ時は、「これでは」と危ぶみの出る定散の自心である為に 五趣八難の道も超えられないが、現生に十種の利益も得られないのだ。

宗教は立派でも、悪用すれば邪教になり、法は尊くても、我執が去らなければ迷信となる。祖師や蓮師は体験の上の御教化であるけれども、末代の道俗は、御教示を覚えて言葉の真似をする棒振り剣術が多いように思われる。 演習と実践と

が違(ちが)うように、岸(きし)に腰掛(こしか)けている人と、溺(おぼ)れている者(もの)とは、心境(しんきやう)が違(ちが)うのだ。やみに来た(き)人と、愛児(あいじ)を喪(な)くした者(もの)とは、境地(きやうち)が違(ちが)うのだ。居眠(いねむ)り半分(はんぶん)に「死(し)にさえすれば往生(おうじやう)」と片付(かたづ)けている人と、現在(げんざい)が罪惡(ざいあく)の猛火(もうか)に包(つ)まれてる者(もの)とは、求道(きやうどう)の態度(たいど)が違(ちが)うのだ。

着物(きもの)を着(き)れば暖(あた)かいと知(し)って信(しん)じたので暖(あた)かい。着(き)なければ暖(あた)かくないぞ。電灯(でんとう)が点(と)れば明(あ)かると知(し)って信(しん)じたので明(あ)かいか。点(と)らなければ明(あ)かると知(し)って信(しん)じたので助(たす)かったか。御飯(ごはん)を食(た)べれば満腹(まんぷく)すると知(し)って信(しん)じたので膨(ふ)れたか。食(た)べなければ膨(ふ)れないぞ。墮(お)ちる者(もの)をお助(たす)けと知(し)って信(しん)じたので助(たす)かったか。本當(ほんとう)に墮(お)ちた人(ひと)でなければ本當(ほんとう)に助(たす)かっているのではないのだ。世(よ)の中の事(こと)でさえ、言葉(ことば)や理屈(りくつ)で通(とお)れないのに、況(いわん)や無量(むりやう)永劫(えいけつ)の大問題(だいもんだい)、もなければ形(かたち)もない、無限(むげん)無辺(むへん)の念力(ねんりき)を、居眠(いねむ)り半分(はんぶん)で合点(がってん)しているのは、仰信(ごうしん)でなくて妄信(もうしん)だぞ。

同行(どうぎやう)よ二、有難(ありがた)い御言(おことば)葉(た)え話(ばなし)を聞(き)いて、有難(ありがた)がつて観念(かんねん)の遊戯(ゆうぎ)をしてはならないぞ。それは真宗(しんしやう)の幼稚園(ようちえん)位の信仰(しんぎやう)だ。往生(おうじやう)は身命(しんみよ)終(つ)でなく、心命(しんみよ)終(つ)でなくてはならないのだ。

平生(へいぜい)業成(ごうじやう)とは、平生(へいぜい)の時往(ときおう)生(じやう)の一大事(いちだいじ)の解決(かいけつ)がつくのだ。現生(げんしやう)不退(ふたい)とは、文句(もんく)を言(い)っている今(いま)、真(しん)・仮(け)の分際(ぶんざい)が明(あ)かに諦得(たいとく)出来る(でき)のだ。即得(そくとく)往生(おうじやう)とは、信樂(しんが)開発(かいぱつ)させられて心(こころ)の往生(おうじやう)が決(きま)まるのだ。うんともすんとも言(い)わなかった久遠(くおん)劫(けつ)からの自力(じりき)の機執(きしゆう)が、他力(たうりき)不思議(ふしぎ)の念力(ねんりき)で切(き)り墮(お)とさる(さ)るのだ。「どうも」の疑(うたが)いの曇(くも)りが、明(み)信(しん)仏智(ぶつち)で明(あ)かになる(なる)のだ。名号(みやうごう)には破闇(はあん)満願(まんがん)の徳(とく)が有(あ)るのだ。今(いま)、無明(むみやう)の闇(やみ)が晴(は)れて、往生(おうじやう)の志願(しがん)が満(まん)足(ぞく)出来る(でき)のだ。

御同行(おどうぎやう)よ二、何年(なんねん)聞(き)けば後生(ごしやう)の一大事(いちだいじ)の解決(かいけつ)がつくのだ。三十年(さんじゅうねん)聞(き)かされても、五十年(ごじゅうねん)聞(き)かされても、晴(は)れたも判(は)らず、曇(くも)ったも判(は)らず、判(わか)らぬ儘(まま)のお助(たす)けと疑(ぎ)心(しん)往生(おうじやう)を平氣(へいき)で言(い)っているが、何(なに)を寝(ね)とぼけてる(る)のだ。「此(こ)の機(き)を見(み)よつたら千(せん)年(ねん)経(た)っても夜(よ)は明(あ)けない」と、晴(は)れられないの(の)を手柄(てがら)のよう(よう)に思(おも)っているが、それ(それ)では法(ほう)の不思議(ふしぎ)さは顕(あら)われないではないか。機(き)を見(み)せて貰(もら)うの(の)が何故(なぜ)悪(わる)いのだ。観念(かんねん)の遊戯(ゆうぎ)をして死(し)後(ご)を夢(ゆめ)見(み)ている人(ひと)には必要(ひつやう)ないだろうが、実地(じつち)に求道(きやうどう)させて頂(いた)く

人には見えないのだ。

鏡に向えば姿が見えるように、大円鏡智に照らさるれば、逆謗の屍の素地がはつきり見えるのだ。口で悪い者と言って

いるのと、照らし出された悪性とは、演習と実践との桁が違うように雲泥の差が有るのだ。悪人正機も言葉の真似であつて、

機の真実が照らし出されていないから、法の真実が貫いていないのだ。畢竟、二種深信が徹底してしていないから、晴れた

境地が諦得出来ないのだ。

「他力他力」と言いながら無力に終つていないか。槍放しに成つていないか。「其儘、其儘」と言いながら、我儘になつて

はいないか。放縦に流れてはいないか。「唯だく」と言いながら安買いしてはいないか。唯に成る事を忘れてはいないか。

その身、その儘、その機のなりで、三悪道にひた走りしてはいないか。後生の夜明けが出来たか。一大事の苦抜けが出来た

か。真仮の水際が鮮やかに諦得出来たか。信前信後の角目が判つたか。仏智の不思議に遇いさえすれば、地獄一定が極楽

一定に転じ、親の念力を諦得しさえすれば、生死の苦海が光明の広海に転ずるのだ。死後の往生のみを語る宗教は、宗教

が死物であつて滅びるのだ。生きた人間をよりよく生かしてこそ、平生業成であり、現生不退となり、生きた宗教と言える

のだ。

即ち、弥陀の名号は、光明無量と寿命無量であつて、これを諦得さして頂く事が、十方三世、普遍常住の真理を究める事

であつて、智慧と慈悲との限りなき身にささるるのである。光明無量の智慧が衆生に届けば、疑いの闇が去るから、第十八の

願文では信となり、成就の文では信心と教えられ、曇鸞大師は之を破闇と説き、道綽禪師は照らし出された悪性を罪悪観と教

え、善導大師は三定死を突き抜けた信機で教えられ、念念称名常懺悔の姿となり、祖師では、信楽開発の時尅の極促を顕

す信一念となり、自己の醜さの懺悔となり、日常生活の動作を慎む俗諦門となるのだ。

寿命無量の慈悲が衆生に届けば、無量永劫生き抜く力が与えられるから、第十八の願文では楽となり、成就の文では歡喜と

教えられ、曇鸞大師は之を満願と説き、道綽禪師は無量寿と反対の露の命を無常観と教え、善導大師は呼声一つで満足した信法で教えられ、称々念々常歡喜の姿となり、祖師では広大難思の心を彰わすとなり、遇法の幸を讚える歡喜となり、日頃の生活の儘が生かされた真諦門となるのだ。この悲智円満の大法を他力より廻向せられ、機無円成と満足すれば、五趣八難の道を超え 必ず現生に十種の益を得るのだ。

五趣とは迷界の地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五種の境界を指すが、対外的に死後にのみ見ず、現在心の中に動く五趣の世界を、金剛の真心を獲得すれば、感謝の心で苦海を慈航さして頂き、八難とは、(1)地獄(2)餓鬼(3)畜生(4)聾盲音瘂の四種の難は、苦に攻めらるるがに教法に遇えず、(5)長寿天(6)辺地は 樂にるるがに信仰に向わず、(7)世智弁聰は悪を増すが故に仏法に耳を傾けず、(8)仏前仏後は善微なるが故に聞法の縁をぐ。この八難の道を超えさして頂き、

金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ

の心光摂護して ながく生死をへだてける

心身悦予し、心得開明し、身も心も南無阿弥陀仏。

五濁悪世の衆生の 選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり

十方法界の功德を全領するが故に、仏凡一体、機法一体となり、無限の大慈に感泣し無縁の大悲を感佩する処に、自然の徳として現生に十種の益を得るのである。

信樂開發の行者には、天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなく、感謝の日暮しささるるが衆護持の益であり、不可称不可説不可思議の功德は行者の身に満ちて 小欲知足の日暮しが至徳具足の益であり、怨みと呪いの世の中に感謝と法悦に満ち満ちて、燃え立つ焰のその儘が御恩喜ぶ因となる転悪成善の益であり、御同朋と睦まじく法味愛樂する時は、百重千

重圍繞して慶び護るが諸仏護念の益であり、眼には見えねど、五濁悪の世の難信之法をよく聞いたとほめたたえらるるが諸仏称讚の益であり、心の曇り更になく、親縁・近縁・増上縁、喜び励む日暮しが心光常護の益であり、無間の底より噴き上げる強情我慢の悪性が、南無阿弥陀仏、阿弥陀仏、心多歡喜の益であり、有形無形の御恩から有情非情の御恵みに、報い得ないに泣かさるるが恩報徳の益であり、八方攻撃受けながら、末代不思議の妙法を届けにや置かぬのが常行大悲の益であり、法をみてよし機を見てよし、現当二世の幸福が入正定聚の益である。

身は極悪最下の機類でありながら、心に極善最上の妙法を諦得し、身は逆謗闡提の機類でありながら、心に超世不共の深法を受得して、生死の苦海の儘が光明の広海と転じ、渦巻く人生の儘が感謝法悦の妙境界となる。之を門徒心得には「ふかく如来の本願を信じ、光明撰取の勝益を喜び」と縦に貫く寿命無量、に貫く光明無量、限りなき慈悲と果てしなき智慧とに生かされた相を真諦門と名づけ、「言行を慎みて一身の修養をらざらん」は、精神的に満足すれば必ず肉体的に慎みとなり、奉仕的活動と顕れて来るのだ。

この精神的の満足が基盤となつて、この肉体的の活動が千波万波を顕して、家庭に顕れては「法味愛樂の上より家族互いに敬愛し、一家の和樂をすすめんと」と、社会に顕れては「衆生共存の大義にもとづき、自他相扶けて社会奉仕の誠を尽くさん」と、国家に顕れては「国家覆護の恩を仰ぎ、おのゝく職業を励みて国運の發展をけん」と、世界人類に対しては「共存共栄の實を挙げ、有無相通じて恒久の平和を招来せん」の俗諦門となるのだ。

この真俗二諦の宗教こそ世界無比、万古不易の妙法であるけれども、活殺は各自の心にあるのだ。実機を抜きにして他力の真似をし、悪性を包んで無我を粧うて、唯信独達の深法を反古にしてはならないぞ。

「利他の信樂うる人は 願に相応するゆえに
教と仏語にしたがえば 外の雑縁さらになし」(十回程心読して下さい)